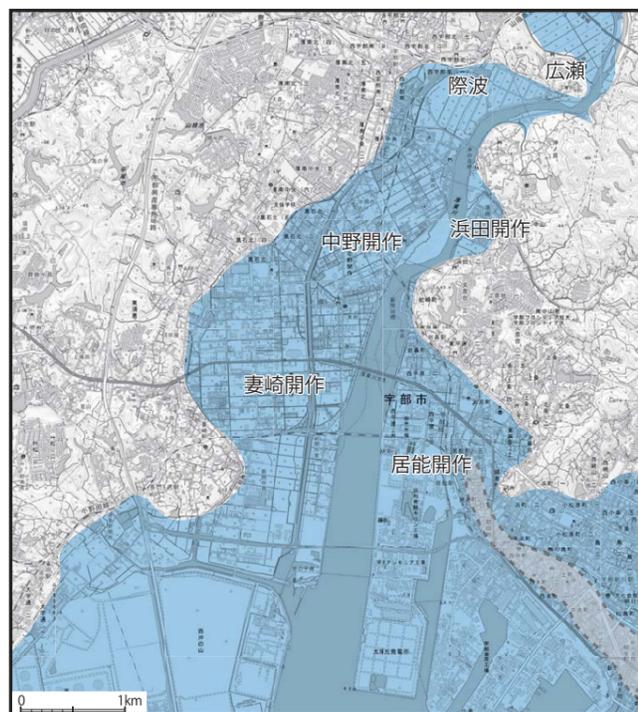


瀬戸内海の開作と中世の海岸線



中世厚東川河口の海岸線推定復元図

「ほっとやまはく」タイム⑦⑦



は大赤字。長州藩では米の収穫量を増やすために、新田開発を大いに推奨したのです。

江戸時代を通じて、藩や家臣などによる開作が盛んに行われました。その歴史を伝えるのは、山陽小野田市の高泊開作浜五挺唐樋（はまごちようからひ）や山口市の名田島新開作南蛮樋（なんばりんひ）といった排水のための水門です。もともとは海の底だった干拓地には塩が残ってしまっているので、作物が育ちません。そこで、潮の満ち引きを利用して排水を繰り返すことで、塩分を減少させるのです。

9平方キロでしたが、1873（明治6）年には約1.7倍の7万9679町余（約790平方キロ）になっています。瀬戸内海にあって多くの干潟は開作によって陸地となり、現在も水田や工場などとして利用されているのです。

②厚東川河口には大きな湾

では、江戸時代以前の瀬戸内海の地形、海岸線はどのようなものだったのでしょうか。それを明らかにするには、まずこのような干拓地を除いて、地形を考えてみる必要があります。

たとえば、厚東川の河口を見てみると、右岸の中野開作、妻崎開作、左岸の浜田開作、居能開作などの開作の位置から海岸線を復元することができます。また、際波は戦国時代

山口県の地図を見ると瀬戸内海側に「開作」という地名をたくさん見つけることができます。江戸時代の防長では、干潟で大規模な開作が行われました。

①山口県を豊かにした開作

1600（慶長5）年、関ヶ原の戦いに敗れた毛利氏は、中国地方8カ国112万石から周防・長門の2カ国36万9000石へと領地を大幅に減らされました。その結果、財政

江戸時代の約250年間におよぶ藩を挙げた新田開発によって、田畑が大きく増えました。江戸時代初期の田畑の総面積は4万7290町余（約46

また、際波は戦国時代

の大永年間（1521〜28年）には開作されたと伝わっており、この辺りにも潟があったことがわかります。厚東氏研究の泰斗であった平中十郎さんの研究成果や「宇部市史」などを参考として海岸線を復元すると、現在とは異なり、かなり深くまで海が入り込む大きな湾だった可能性が高いのです。

宇部という地名の初出とされる「むべといふとまり（泊、船が停泊する場所）」、「散木奇歌集」、1097（承徳元）年に源俊頼が大宰府から京都へ戻る際に記した「は、この湾の中にあつたのでしよう。」

③海の視点から

県立山口博物館では今年度、船の科学館が行う「海の学びミュージアムサポート」の支援を受けて、中世の港や交通についての調査研究を進めています。瀬戸内海沿岸の柳井や下松でも宇部と同じように地名などから、中世の海岸線や港の位置を復元すると、現在とは異なる交通網が見えてきました。開作による瀬戸内海の開発は、地域の生産力を高めるとともに、海の交通にも大きな変化をもたらしたのです。

阿部来（考古担当学芸員）
▽次回は27日です。



名田島新開作南蛮樋（国史跡）



高泊開作浜五挺唐樋（国史跡）

山口県立山口博物館
TEL 083-922-0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。最新情報はホームページで。

